



「市民社会」ドイツの背景を学ぶ 自由で活発なコミュニティが成り立つ理由とは？

- テーマ:ドイツの「コミュニティづくり」とその基本的な考え方
- ゲスト講師:高松平蔵(ジャーナリスト)

ドイツ独自のコミュニティ“フェライン”って？

京都の地域経済紙の記者を経て、2002年にドイツのエアランゲン市(バイエルン州)に拠点を移しました。異文化研究などで、調査対象の社会や集団に参加して観察する「参与観察」という手法があります。生活拠点のこの町でそれを実践する形になり、その上で地方都市の発展をテーマに取材、執筆活動を行っています。

ドイツと日本では“都市”という言葉の持つ意味合いが違い、その背景にはドイツ独自の制度や歴史があります。その前提を踏まえた上でドイツのコミュニティがどのようなものか、国・社会においてどのような位置づけにあるかを紐解きつつ、皆さんにコミュニティとその大前提について考えてほしいと思います。

まずはドイツという国の特徴として、ドイツと日本は実は面積はほぼ一緒。しかし、ドイツの人口が8400万人に対し、日本は1億2500万人と大きく異なっています。また日本が中央集権型の国家であるのに対しドイツは地方分権型で、たとえ人口規模が2、3万人程度であっても都市と呼ばれる街があります。歴史的に見ると中世に定められた「都市権」という制度に由来します。また時代が下がって、19世紀にも「ただ人口が多いだけでは都市ではない」という議論が起こっています。

では、そんなドイツのコミュニティとはどういったもののでしょうか。そもそもコ

コミュニティの定義とは「われわれ意識によって結びついている共存形態」です。家族や友人はもちろん会社や非営利団体、政党などがその例です。それにしても、ドイツには日本の自治会のような半強制的な加入を求められる地縁組織がありません。また、そのつながり方を整理すると、「共同体化」と「協同化」の2通りがあり、感情や価値観で結びつく個人的な関係(共同体化)と、共に利益や目的を追求する関係(協同化)に分けられます。しかし、実際には、協同化した関係のなかに個人的に親密になる人々がいたり、共同体化しつつも契約や雇用の関係にあったりと両者は流動的でもあるとしています。

こういったさまざまなコミュニティがあるなかで、とりわけドイツで特徴的なのが「Verein(フェライン)」です。団体、結社、クラブなどと訳されますが、おおむね非営利団体(NPO)に相当し、現在ドイツ国内には約60万を数えます。日本のNPOがおよそ5万ですから、その数の多さがよくわかります。フェラインの種類を分類すると、スポーツや趣味を追求する「自己目的クラブ」、アートや教育などの振興活動をする「理想目的クラブ」、困っている人に向けた支援や援助を行う「自助/支援目的クラブ」に整理できます。誰でも気軽に所属できるのが特徴です。そして5000万人以上が何らかのフェラインの一員で、複数のフェラインに所属している人も少なくありません。

統計によれば、最も多いフェラインは、余暇や郷土保護、次いで社会福祉となっていて、行政がカバーできない社会に必要なものを代わりにフェラインの活動でカバーしている側面もあります。

もう少し詳しくフェラインの特徴を見ていきます。まず、参加する個人にとって、フェラインは、自分の興味に沿って自発的に参加できる組織です。誰にも強制されず、やめるのも自由。自分の自由時間(余暇)で行うのが原則です。

スポーツ分野のフェライン(スポーツクラブ)を例に見ると、個人的な楽しみや気晴らし、健康、学習などさまざまな目的で参加しています。人間関係はあくまで「スポーツを共にする仲間」で平等です。それは他者の呼び方にも表れます。ビジネスなどで初対面では、英語でいう「Mr./Ms.〇〇」と呼びますが、スポーツクラブではファーストネームで呼び合うんですね。たとえ年齢差があってもそうです。さらに、トレーナーや管理者として、あるいはイベント時などにも自由意思で手伝える。つまりボランティアのプラットフォームにもなっています。

このようなスポーツクラブはスポーツが核になったコミュニティと言えますが、自主的な運営がなされ、その基本は意見の自由や民主主義などの社会正義が前提です。私が住む町(人口12万人)で700以上のフェラインがあり、そのうち100がスポーツクラブです。地縁組織がなくとも、個人の自由意思で成り立っているコミュニティが700以上あることを意味します。

フェラインが社会に果たす役割とは

では、なぜドイツでフェラインのようなコミュニティが成り立つのでしょうか。「理性で自己決定する私」がドイツ社会における「人」の一般的なメンタリティだからです。実際には学校や仕事で費やす時間が最も多いですが、たとえば余暇とは、義務や労働の後の余った時間ではありません。自分で使い方を決められる自由時間という考え方が強くあります。

また、ドイツの憲法にあたる「ドイツ基本法」で、「人格の自由な発展」が定められていることも一因だと考えます。

メンタリティや法的な文言には、「人は理性で考え、社会で自分の場所を獲得できる」という約200年前に興った啓蒙思想の影響があると思われます。

加えてドイツにおける社会とは「自己決定を行う人間の平等な関係の中で行われる交際の総体」と説明できるでしょう。国家による人権侵害などを防ぐ防波堤として「公共圏」という考え方が浸透しています。これは人々が生活のなかで共通の関心を持つことによって成立する空間のことで、国家から独立した議論を行う。たとえばジャーナリズムやフェライン(NPO)などがその象徴的な存在です。この公共圏があることで独裁的ではない民主的な国が形づくられる。人々は自由に行動が可能で、その「自由」にはイニシアティブを取る自由さえあるわけです。それが欧州で想定されている「社会」です。

一方で、日本における「社会」は近代以降に入ってきた輸入概念です。あくまでも輸入ですので、欧州の実態とは異なり、独自の使われ方も出てきます。たとえば「社会人」とか新聞の「社会欄」などがそうですが、欧州の文脈から言えば説明のつきにくい言葉です。

また、国家と個人の間に、欧州のような公共圏が想定されていません。その上で、人とのつながりも地縁や擬似血縁が内省化されており、決まった秩序のなかで役割を果たそうとする意識が強いのです。その結果、能動的な言動が忌避されがちです。

その一つの表れが“○○させていただく”という表現ではないでしょうか。必要以上に多用されると「あなた自身はなにがしたいの?」と尋ねたくなる(笑)。本来はイニシアティブをとる自由まであるはずの公共空間も、日本では他人に迷惑をかけないことが優先されてしまいますよね。そういう意味ではヨーロッパにあるような社会は日本では成り立っていないのかもしれませんが。

こういったコミュニティのあり方を見ていくと、国家が社会をどうデザインしていきたいかも見えてきます。

ドイツで考えられている「社会」とはデモクラシー、人間の尊厳、人権、自由、平等、連帯、寛容などの価値観が大切というのが前提。お互いを尊重し合い、共通善を破壊しない限り、誰でもどこでも自由で平等が保障され、時に連帯し、考え方の違いに寛容であることが求められます。

また「社会」は動的なものと考えられている。なぜなら先ほど述べた価値観が実現された「社会」が理想で、「どれだけ実現されているか」という問いが立ち、「理想に向けて発展させるべき」ということになる。さらに人々の根底に「私＝社会」という考え方が加わります。社会の一部である自分自身が自己決定でアクションを起こしていくのが当然のため、政治にも気軽に参加します。日本で昨今、用いられるようになった「自分ごと」という言葉は、欧州のような構造がないものの、社会に参加する必要性を説いているように思えます。

言い換えるならば、ドイツの国家が目指す社会とは「デモクラシークラブ」と表現できそうです。市民が自己決定でデモクラシーに参加し、「メンバー」は自由に意見を表明し、共通善を考えながら妥協点を探すプロセスを持っている。つまりデモクラシーは「共生」のための制度です。フェラインの運営方法は民主的で、それを「自分たちの基本的な考え方」として強調している。選挙の投票率等の話に集中しがちな日本のデモクラシーと異なる点です。

ドイツの憲法にあたる「基本法」は、このデモクラシークラブの維持・促進のための装置と言える。だから、自己決定でデモクラシークラブに参加する人を増やすために、学校や文化政策などで学習する取り組みが地方の末端にまで整備されています。コミュニティがたくさんあれば、意見交換も活発になり社会が動くようになる一方で、助け合いによって安定も生まれます。個人の充実と比例し、社会をよりよく変えていくのがドイツのコミュニティの本質と言えます。

日独の社会背景の違いを知り、問いを立てる（トークセッション）

「日本では政治的なコミュニティはまだ当たり前ではなく、ドイツとのギャップを感じた」との感想をいただきました。ドイツの場合、理想とされる社会像があります。つまり政治とコミュニティの感覚がドイツでは連続性があるように思います。しかし日本ではコミュニティの感覚に「理想像」「政治」をつなげようとするとう意識高い系”などと呼ばれてしまうこともありますね。

また、「自発的に参加できる組織は理想だが、日本では一度入るとやめにくいような空気を感じる」という意見も、重要な論点です。日本のNPOでは地縁・血縁的な人間関係を前提にすることが多いです。そうすると集団の長くいる人が偉い、年長者が偉いという関係が発生しやすい。また、たとえ本人は気さくでも周りがそのように扱うケースもあります。ドイツの場合、参加者はみんな平等。極端な話、参加した途端に異論を述べても良いのです。日本も民主主義の国だけど、実態はそうならないというのがドイツに住んでいて実感するところです。

また、「日本は島国でドイツは大陸にある国という違いはコミュニティにも影響しているか」という質問をいただきましたが、それは大いにあると思います。例えば大陸にあるドイツには戦争が起こるたびに、移民や難民がやってきて、そのたびに社

会の構成員が変わり、対応していかなければなりません。今日では「ドイツ語を覚えて、同時にデモクラシーを勉強し、『デモクラシークラブ』の一員に（自主的に）なってね」というやり方です。実際には問題が山積みですが、日本目線で言えば、歴史的な背景もあって、他者を受け入れることに寛容で、コミュニティ形成の経験が蓄積されているように思います。

次いで、「日本では公共空間で自由に振る舞うのはなかなか難しいと感じるが、どうしたらドイツのような連帯的な行動が増えるのか」という質問ですが、まずは、「エゴイスティックでない限り、自己決定の他人の行動に対して、とやかくいうな」という考えが必要でしょう。日本では「空気を読め」という言葉に表れているように、独立した自己を放っておいてはくれません。あとは摩擦を嫌いますね。意見と人格を一緒にしがちなので、意見が違うとすぐ「絶交だ」となってしまう。そうならないために相手への最低限の敬意を払う方法や考え方を、教育の中にでも取り入れていくべきだと思います。

「ドイツ人の考え方として、なにか議論するときに他人に配慮することはないのか」という質問ですが、たとえみんながバラバラな意見を言っても、全部実現することはありませんよね。そのせいか激しい議論も当然出てきますが、意外とあっさり受け止めるという印象もあります。形式的に言えば、そこから共通善を考え、妥協点を見出していくプロセスに入りますが、コミュニケーションコスト（時間や労力）がやたらかかるのです。その様子から言うと、日本で最近流行っている相手を論破するようなことはデモクラシーには合いません。少し別の視点から言うと、伝統的なヨーロッパの学問は対話です。お互いの持っているものをぶつけて訂正し、修正し、新しいアイデア出していく。こういったことも議論の様式に影響しているかもしれません。

「日本がコミュニティを強くするためには、日本らしいやり方を追求すべきですか」という意見ですが、まず、ヨーロッパのやり方をコピーするのは無理です。ドイツが先進国というよりも、歴史の成り立ちが違う。では日本はというと、たとえば戦前の日本には、教育的に作られた共通の考え方がありました。例えば長幼の序のように、体育会系的でデモクラシーの考え方とは合いません。それでもそういう共通の規範があったことが、戦後の経済発展に影響したと。そして、現代の私たちにはかつてのような、共通の規範が希薄になっている。そんな見方があります。一方、たとえ「輸入」であっても日本はデモクラシーの国です。また今日、互いにアイデアを出し合い、高め合っていく時代です。お互いを尊重しながら、人格と意見を分けて考えることを実践していくにはどうすべきか、これが「問い」です。そして時間をかけて取り組んでいくことが重要です。例えば、このセッションのようなことを、その機会と捉えて、学び直しませんかと言うことです。